

大学発アーバンイノベーション神戸 研究成果報告書

令和4年5月26日

申請区分		一般助成型	課題番号	A20101
研究課題名		自閉症スペクトラム障害者のためのセルフケア行動獲得プログラムの開発		
研究期間		令和 2 年度から令和 3 年度		
研究代表者	氏名	山本真也		
	大学等	兵庫教育大学		
交付決定額(研究期間全体)		786 千円		

○研究成果の概要（400 字以内）

新型コロナウイルスの感染拡大防止のためにマスクの装着やソーシャルディスタンスを保つことなどが求められている。しかし、自閉症スペクトラム障害児にとってそれらの行動の獲得は非常に難しい。これらのセルフケア行動を教えるため、本研究は自閉症スペクトラム障害児にセルフケア行動を教えるための行動的スキルトレーニングを含めた介入プログラムの有効性を検討し開発した。本研究には3名の自閉症スペクトラム障害児が参加し、それぞれ異なるセルフケア行動の獲得を目指した。本研究の結果、行動的スキルトレーニングを用いることで速やかなセルフケア行動の獲得は促されたものの、日常生活場面への般化に課題が見られた。この結果から、「セルフケア行動獲得期」「モチベーション増進期」「般化促進期」の3つのフェイズで構成される介入プログラムを参加者に実施したところ、日常生活場面でもセルフケア行動を自発することができるようになった。

○研究成果の学術的意義や社会的意義（200 字以内）

自閉症スペクトラム障害児にはこれまでセルフケア行動を教えた研究はほとんど見られなかった。様々な行動の獲得に有効であると示されている行動的スキルトレーニング、また、般化に有効である技法がセルフケア行動の獲得にも有効であることが示されたことはこれまでの学術的見解を拡大した。また、簡易なフローチャートを作成したことで学校等でセルフケア行動を教えるための指針を示すという社会的意義を満たした。

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初より現在に至るまで、新型コロナウイルスの感染拡大予防に関して、マスクの装着やソーシャルディスタンスを保つことなどの新しい生活様式の遂行が求められてきた。しかし、これらのセルフケア行動は自閉症スペクトラム障害者（ASD）にとっては遂行することが難しい行動である。ASDは他者との関係性やその時々状況を把握した上で適切な距離を取ることに困難を示すことがしばしばあり、また、行動の遂行に対して即座に直接的かつ明確な結果が随伴しなければその行動を獲得することが難しいためである（Dixon & Cummings, 2001）。

このような ASD の特性に対して、様々な支援方法が開発されてきた。その方法の一つが行動的スキルトレーニングである(Erhard, Falcomata, & Harmon, 2021)。行動的スキルトレーニングとは、インストラクション、モデリング、ロールプレイ、フィードバックを用いて、標的となる行動に関する一連の流れを ASD に体験してもらうことによって効率的に行動の獲得を促すための方法である。この支援方法は応用行動分析学の理論からも支持され、実際的にも多くの行動を教えることに成功している(Singh, Moore, Furlonger, Anderson, Busacca, & English, 2017; Thomas, Lafasakis, & Spector, 2016; Whiting, Miller, Hensel, & Dixon, 2014)。

2. 研究の目的

上記に挙げた ASD の課題及び行動的スキルトレーニングの可能性を受けて、本研究の目的は、ASD にセルフケア行動を獲得させるための有効なプログラムを開発することとした。特に、行動的スキル訓練のセルフケア行動の獲得に対する有効性を検討した。なお、本研究におけるセルフケア行動とは、身体的距離の確保、場面に応じたマスクの着脱、手洗いと消毒液の適切な使用など、新型コロナウイルス感染拡大予防のための新しい生活様式にて提示された各行動を指した。

また、本研究で得られた知見を基にしたマニュアルを作成し、神戸市において本プログラムを簡易に使用できるようにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、3 名の ASD に対して行動的スキルトレーニングを用いてその効果を評価することで、行動的スキルトレーニングがセルフケア行動の獲得に対する有効性と課題を明らかにすることを試みた。

1) 参加者

参加者 A は研究開始当時小学 1 年生の女子であった。A は、医師によって自閉症スペクトラム障害の診断を受けていた。A はマスクの着用は可能であり、他者との距離感を適切に取ることができたが、食事前や外出先から家に帰ってきた時に手洗いをすることができなかった。

参加者 B は研究開始当時高校 1 年生の男子であった。B は、医師によって自閉症スペクトラム障害の診断を受けていた。B は他者との距離感を適切に取ることができ、適切な場面で手洗いを行うことができたが、どのような場面でマスクの着用するべきか分からないと述べることもあり、実際の様子を観察してもマスクを着用することはほとんど見られなかった。

参加者 C は研究開始当時小学 6 年生の男子であった。C は、医師によって自閉症スペクトラム障害の診断を受けていた。C は他者との距離感を適切に取ることが難しく、会話をする時に気分が盛り上がるかと相手に過剰に顔を近づけて話す癖があった。

参加者 A と B に対しては兵庫教育大学発達心理臨床研究センターで研究を実施した。参加者 C に対しては C の自宅で研究を実施した。

2) 標的行動

参加者の実態を受けて、それぞれの参加者ごとに異なる標的行動を設定した。参加者 A の標的行動を「食事前及び外出先から帰宅した際に手洗いをすること」、参加者 B の標的行動を「外出時にマスクを着用すること」、参加者 C の標的行動を「他者と会話する時に少なくとも腕を伸ばしただけの距離を取ること」として設定した。

3) 指導方法

本研究の基本的な指導方法として行動的スキルトレーニングを用いた。参加者ごとに標的行動が異なったため細部は異なるが、基本的には以下のような方法で取り組んだ。

初めに標的行動の実施方法を口頭で説明するインストラクションを行った。次に、実際にどのように実施するかを研究者が目の前でやってみせるモデリングを行った。例えば参加者 A に対しては、実際の洗面所まで一緒に行って、A の前で研究者が手洗いをするモデルを見せた。モデリングを終えたら、提示したモデルの通りに参加者自身でやってみるロールプレイを実施した。研究者は参加者のロールプレイの様子を確認し、その出来栄に応じて良かったところ・改善点を伝えるフィードバックを行った。参加者のロールプレイの結果が申し分ない出来栄になるまで、ロールプレイとフィードバックを繰り返し行った。

4. 研究成果

本研究の結果、行動的スキルトレーニングを実施した後、すべての参加者は速やかに標的行動を獲得することができました。しかし、研究を実施している間の家庭内での行動に関する保護者からの報告によると、研究で学習した行動を日常生活で応用して用いることができていないことも明らかになった。このことから、単に行動的スキルトレーニングを行うだけでは ASD にセルフケア行動を教えるために

は不十分であることが示された。

そこで、兵庫教育大学大学院に所属する大学院生と共に協議を行い、図に示したようなフローチャートを作成した。そして、本研究の3名の参加者に対してもこのフローチャートに沿って研究を遂行した。その結果、全ての参加者は日常生活の中でも標的行動を自発することができるようになった。

以上のことから、ASDにセルフケア行動を教える際には、3つのステップを踏まえた上でプログラムを進める必要性が明らかになった。それらのステップは、「セルフケア行動獲得期」「モチベーション増進期」「般化促進期」の3つである。「セルフケア行動獲得期」とは、セルフケア行動を行動的スキルトレーニングによって獲得するステップである。「モチベーション増進期」とは、セルフケア行動を使うことでどのようなメリットがあるのかを覚えるステップである。「般化促進期」とは、獲得したセルフケア行動を様々な場面に応用するためのステップである。

計画の遅れが生じたことから、本研究で得られた成果を学校や地域に導入することはできなかった。また、ASDには本研究で扱ったセルフケア行動以外にも教えるべきセルフケア行動も存在する。新型コロナウイルスの感染が収まって、新たな感染症が猛威を振るわないとは限らない。その時に備え、本研究で得られた知見と成果をさらに拡大することが今後求められると考える。

<引用文献>

- Erhard, P., Falcomata, T. S., & Harmon, T. (2021). Behavioral Skills Training. *Encyclopedia of Autism Spectrum Disorders*, 661-667.
- Singh, B. D., Moore, D. W., Furlonger, B. E., Anderson, A., Busacca, M. L., & English, D. L. (2017). Teaching reading comprehension skills to a child with autism using behaviour skills training. *Journal of autism and developmental disorders*, 47(10), 3049-3058.
- Thomas, B. R., Lafasakis, M., & Spector, V. (2016). Brief report: Using behavioral skills training to teach skateboarding skills to a child with autism spectrum disorder. *Journal of autism and developmental disorders*, 46(12), 3824-3829.
- Whiting, S. W., Miller, J. M., Hensel, A. M., Dixon, M. R., & Szekely, S. (2014). Increasing the accuracy of EpiPen administration with a brief behavioral skills training package in a school for autism. *Journal of Organizational Behavior Management*, 34(4), 265-278.

※大学発アーバンイノベーション神戸による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、神戸市の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

図. セルフケア行動のための指導フローチャート

用いるべき支援方法

